

3. 事業概要

(1) 常設展示

常設展示室は全体で5室の構成となっている。第1室は「山梨の文学風土」と「樋口一葉」コーナー、第2室は「山梨出身ゆかりの作家と作品」、第3室は芥川龍之介コーナー、第4室は飯田蛇笏・飯田龍太記念室、第5室は山梨出身・ゆかりの作家104名をジャンルごとに年2回入れ替えて紹介している。

常設展示室の第1～4室は、下記のとおり春夏秋冬にあわせて年4回、一部の資料の入れ替えを行い、第1室の一面にコーナーを設け、期間限定で資料を公開した。また、9月2日（火）から平成27年3月15日まで第1室に村岡花子のコーナーを増設した。なお、同コーナーでは一部資料を追加し、平成27年2月7日（土）～3月15日（日）の間、全国文学館協議会共同展示「3.11 文学館からのメッセージ」としても行った。

以下の資料一覧には、平成26年3月18日（火）～平成27年3月15日（日）の間、常設展示室に出品した資料すべてを提示した。

第1室

期間限定公開

- ◆春の常設展 3/18（火）～6/8（日）林真理子「白蓮れんれん」原稿ほか
林真理子「白蓮れんれん」原稿 第一話・第十三話・あとがき
林真理子『白蓮れんれん』1994（平成6）年10月 中央公論社
「婦人公論」1994（平成6）年1月
林真理子「葡萄が目にしみる」原稿
林真理子『葡萄が目にしみる』1984（昭和59）年11月 角川書店
林真理子「女文士」原稿
林真理子『女文士』1995（平成7）年10月 新潮社
林真理子「葡萄物語」原稿
林真理子『葡萄物語』1998（平成10）年4月 角川書店
執筆に使用したサインペン
かつぬまワインクラブ/HaRamoワイン
- ◆夏の常設展 6/10（火）～7/25（金）甲州の近世文学1 辻嵐外の書画
7/26（土）～8/31（日）甲州の近世文学2 五味可都里とその周辺
辻嵐外自画賛「白かれといつまでもとぶ扇かな」幅
辻嵐外自画賛「ゆふだちや骸の垢のぬける音」幅
辻嵐外「八重ざくら見れば火宅といふは何処」短冊
辻嵐外「初雪に」他八句書付
辻嵐外「月と花」自画賛
五味可都里「大方の月夜にあへり梅の花」幅
五味可都里「山はさくら桜はやまの限かな」短冊
五味蟹守「花の空打かさなりて山ざくら 名月やはしとれば箸のかげもある」幅
五味蟹守編『新編俳諧文集』下 1825（文政8）年刊
蕪庵 落款印
- ◆秋の常設展 9/2（火）～11/30（日）山崎方代 生誕百年
山崎方代「ふるさとの右左口郵は骨壺の底にゆられて吾が帰る村」幅
山崎方代「茶碗の底に梅干の種が二つ並びをるこれが愛というものだ」幅
方代旧蔵『ヴィヨン詩鈔』1948（昭和23）年11月 全国書房
山崎方代「フランソワ・ヴィヨンの詩鈔ふところに一ツ木町を追われゆくなり」短冊
山崎方代「茶ぶ台の上の土瓶に心中をうちあけてより楽になりたり」短冊
山崎方代「何処かで」短歌草稿

愛用の品 急須・茶碗・拡大鏡・眼鏡・万年筆
「一路」第8巻第12号 1936（昭和11）年12月
山崎方代『方代』1955（昭和30）年10月 山上社
會津八一 山崎方代宛葉書 1955（昭和30）年10月23日
吉野秀雄 山崎方代宛葉書 1966（昭和41）年10月12日消印
山崎方代「『方代』後記」草稿
山崎方代「瑞泉寺 右左口 心げう寺 安国寺」草稿
山崎方代「泣くほかに支えしものが無いゆえにぬば玉の夜をこめて泣きたり」幅
山崎方代「父母のふるさとに来て腹赤き蟹の子供を吹き散らすなり」額装
「多摩川帖 十四」
山崎方代「ゆえ知らぬ涙は下る朝の陽が茶碗の中のめしを照せり」色紙
山崎方代「一ひらのさくらの花が流れ来て黒き机の上にとまれり」短冊
創作ノート「小屋の中の」ほか
創作ノート「木曾谷の」ほか
山崎方代「わが歌の秘密」原稿
愛用の品 文鎮・筆
山崎方代『右左口』1973（昭和48）年12月 短歌新聞社
山崎方代『こおろぎ』1980（昭和55）年11月 短歌新聞社
山崎方代『青じその花』1981（昭和56）年12月 かまくら春秋社
山崎方代『迦葉』1985（昭和60）年11月 不識書院

- ◆冬の常設展 12/2（火）～3/15（日）会津八一 書画・書簡より
会津八一「かすがののよをさむみかもさをしかのまのちまたをなきわたりゆく」幅
会津八一「かみつけのくにのかぎりとなつくもはひまにもしろきほだかねのゆき」額装
会津八一 松下英麿宛書簡 1943（昭和18）年11月15日
会津八一 奥田勝宛書簡 1950（昭和25）年2月23日
会津八一 奥田勝宛書簡 1950（昭和25）年8月4日
会津八一「ほほゑみてうつつこころにありただすくらばとけにしくものぞなき」扇面

- ◆村岡花子コーナー 9/2（火）～3/15（日）
「心の花」第18巻第6号 1914（大正3）年6月〈複製〉
「短歌 明治四十二年十二月」ノート／詠草「ひなげし」〈写真〉
柳原白蓮「春浅しそらには空のひかりあり」色紙
村岡花子訳『モーセが修學せし國』1919（大正8）年5月 救世軍本営 個人蔵
E・ポーター作 村岡花子訳『喜びの本』1939（昭和14）年12月 中央公論社
村岡花子『桃色のたまご』1935（昭和10）年11月 健文社
村岡花子『たんぽぽの目』1943（昭和18）年6月再版 鶴書房
モンゴメリ『Anne of Green Gables』1908年冬の版〈複製〉
村岡花子「赤毛のアン」翻訳原稿 第三章冒頭〈複製〉
モンゴメリ 著 村岡花子 訳『赤毛のアン』1952（昭和27）年5月 三笠書房

山梨の文学風土

甲斐のうた（パネル展示）

酒折の宮／塩の山・差出の磯／都留の郡／甲斐の牧

甲州の紀行文

深草元政『身延道の記』元禄17年刊
荻生徂徠『徂徠集』巻之十五 元文元年序文「峡中紀行」収録
賀茂季鷹『富士日記』文政6年刊

甲府学問所 徽典館

萩原元克宛 徽典館学頭任命通知書
乙骨耐軒「維新亭齋詩初稿」
乙骨耐軒「甲役途中詩」

国学を学んだ人々

萩原元克編『甲斐名勝志』天明3年9月刊
萩原元克「うまひとの」短冊
本居宣長点 辻守瓶「春十首」和歌

樋口一葉 (ひぐち いちよう)

吉川学校下等小学第八級卒業証書 1878 (明治11) 年6月
馬場孤蝶「一葉の住みし町なり夕時雨」幅
樋口一葉 馬場孤蝶宛書簡1896 (明治29) 年5月30日
樋口一葉 小短冊
一葉愛用の短冊ばさみ
下村為山 画 樋口一葉肖像
樋口一葉 雨宮源吉宛書簡 1890 (明治23) 年7月
樋口一葉 古屋よし宛書簡 1890 (明治23) 年7月
樋口一葉 古屋家宛書簡 1890 (明治23) 年10月13日
一葉筆手習い帖「徒然草」「竹取物語」一葉筆手習い帖「伊勢物語」
愛用のしおり
樋口一葉「さぐれいしの昔よりして契りけん岩ねをめぐるたに河のみづ」短冊幅
樋口一葉 半井桃水宛書簡 1892 (明治25) 年秋
樋口一葉「にごりえ」未定稿
鏑木清方「にごりえ」全十五函 (複製) 本1957 (昭和32) 年12月 美術出版社
樋口一葉「雪の日」未定稿 幅
樋口一葉 雨宮源吉宛書簡 1893 (明治26) 年12月7日、12月16日
樋口一葉 樋口幸作宛葉書 1894 (明治27) 年3月14日
新五千円札 (A000006A番)
青海学校小学高等科第四級卒業證書
一葉愛用の筆立て
一葉愛用の髪飾り・櫛・こうがい
一葉旧蔵 短冊ばさみ
写真パネル 母多喜・奈津 (7歳頃)・姉ふじ・妹くに 本郷6丁目5番屋敷時代
写真パネル 左から次兄・虎之助、父・則義、長兄・泉太郎
樋口虎之助作 薩摩焼絵付皿
写真パネル 萩の舎集合写真
写真パネル 半井桃水
写真パネル 竹内桂舟 画「うもれ木」第7回挿絵
写真パネル 文学界同人
「武蔵野」第1輯 (複製) 1892 (明治25) 年3月 今古堂
樋口一葉「たけくらべ」原稿 (複製)
「文芸倶楽部」第2巻第5号 1896 (明治29) 年4月
「にごりえ」台本 1962 (昭和37) 年9月 新橋演舞場
樋口一葉「ゆく雲」未定稿 (複製)
写真パネル 一葉女史の碑建碑の日 1922 (大正11) 年10月15日
馬場孤蝶 編集・校訂『一葉全集』前編 1912 (明治45) 年5月 博文館

第2室

井伏鱒二 (いぶせ ますじ)

- 井伏鱒二「幸富講境川に来る裏で釣る部屋で飲むそれで良い」幅
井伏鱒二「あの山は誰の山だ どつしりとしたあの山は」幅
井伏鱒二 野上照代宛書簡 1985 (昭和60) 年5月7日消印
井伏鱒二「わたくしは平凡な言葉を好きな人間になりたい」額装
映画「黒い雨」ポスター・パンフレット
井伏鱒二「頓生菩提」原稿
井伏鱒二「あきのおんたけ こゝのつどきに ひとりのぼれば はてなきおもひ」幅
井伏鱒二「十一屋の若旦那」原稿
井伏鱒二「このさかづきをうけてくれどうぞなみなみつがしてくれ」
「はなにあらしのたとへもあるぞさよならだけが人生だ」対幅〈複製〉
井伏鱒二「老僕のゐる風景」原稿〈複製〉
井伏鱒二 野上照代宛書簡 1985 (昭和60) 年5月7日消印
井伏鱒二 野上照代宛書簡 1987 (昭和62) 年3月1日消印
映画「黒い雨」ポスター
写真パネル 栃代川にて 飯田龍太と 1963年4月16日
井伏鱒二『山椒魚』1976 (昭和51) 年9月 成瀬書房
井伏鱒二『黒い雨』1966 (昭和41) 年10月 新潮社
井伏鱒二「本日休診」原稿〈複製〉
井伏鱒二『本日休診』1950 (昭和25) 年6月 文藝春秋社
愛用の釣り竿と魚籠
井伏鱒二『小黑坂の猪』1974 (昭和49) 年7月 筑摩書房
井伏鱒二『岳麓点描』1986 (昭和61) 年4月 弥生書房

太宰 治 (だざい おさむ)

- 太宰治 浅見淵宛葉書 1936 (昭和11) 年4月7日消印
太宰治 浅見淵宛葉書 1936 (昭和11) 年6月4日消印
太宰治「わが名は狭き門の番卒」色紙
太宰治 井伏鱒二宛書簡 1945 (昭和20) 年8月末 (推定)
太宰治 井伏鱒二宛書簡 1936 (昭和11) 年9月 日不明
太宰治 高田英之助宛葉書 1939 (昭和14) 年1月11日消印
太宰治 井伏鱒二宛書簡 1939 (昭和14) 年1月24日
写真パネル 太宰と妻美知子の結婚式 1939 (昭和14) 年1月8日
太宰治文学碑「富士には月見草がよく似合ふ」(表面) 拓本幅
太宰治文学碑 撰文(裏面) 拓本幅
太宰治『女生徒』1939 (昭和14) 年4月 砂子屋書房
太宰治『右大臣実朝』1943 (昭和18) 年9月 錦城出版社
太宰治「陰火」原稿〈複製〉
太宰治『晩年』1936 (昭和11) 年6月 砂子屋書房
太宰治 浅見淵宛書簡 1940 (昭和15) 年6月21日〈複製〉
太宰治 井伏鱒二宛書簡 1936 (昭和11) 年9月 日不詳
太宰治 熊王徳平宛葉書 1944 (昭和19) 年9月10日
太宰治 青木辰雄宛葉書 1945 (昭和20) 年10月30日〈複製〉
太宰治「人間失格」原稿〈複製〉原本 日本近代文学館蔵

檀 一雄 (だん かずお)

- 檀一雄「自画像」額装
檀一雄「世界のもの憂き町を歩きつめたる悲しき男有り その男愛を語らず その男ツケを払はず

挙句の果の昇天を信ずと謂 合掌」色紙
三島由紀夫 檀一雄宛書簡 1949（昭和24）年6月26日
檀一雄「落日を拾ひに行かむ海の果」色紙
愛用のワインボトルの籠
檀一雄「落日を拾ひに行かむ海の果」色紙
檀一雄「モガリ笛いく夜もがらせ花に逢はん」色紙
檀一雄 中国でのスケッチブック
檀一雄「太郎生後九十四日」額（複製）
写真パネル 新潮社提供
写真パネル 能古島の草庵「月壺洞」にて 1975（昭和50）年
檀一雄「モガリ笛いく夜もがらせ花に逢はん」色紙
檀一雄「秋果百韻」額装
蔡元培「半軒倚竹夜聽雨」「一盞秋燈閒讀書」幅
檀一雄「醉余二陶の図」額装
檀一雄「中国でのスケッチブック」
檀一雄「旅立ち」原稿（複製）
檀一雄『リツ子・その愛』『リツ子・その死』1950（昭和25）年4月 作品社
檀一雄「微笑」（『火宅の人』第1章）原稿（複製）
檀一雄『火宅の人』特装本 1979（昭和54）年6月 新潮社
檀一雄『真説石川五右衛門』1951（昭和26）年9月 新潮社

山本周五郎（やまもと しゅうごろう）

風間完 画「樅ノ木は残った」イメージ画
山本周五郎「多忙」原稿
「五瓣の椿」ポスター
山本周五郎「染血桜田門外」草稿（村上幽鬼）
山本周五郎「静春想」草稿（島津恭二）
山本周五郎「空蟬」草稿（清水清）
山本周五郎「或る男女の話」草稿（清水清）
映画「さぶ」ポスター
「さぶ」ちらし 新橋演舞場
山本周五郎「おごそかな渴き」原稿
写真パネル 秋山青磁 撮影 映画館
写真パネル 秋山青磁 撮影 書齋 間門園にて
山本周五郎『赤ひげ診療譚』1959（昭和34）年2月 文藝春秋新社
山本周五郎『さぶ』1963（昭和38）年8月 新潮社
「さぶ」ちらし 2003（平成15）年1月 新橋演舞場
山本周五郎「夏草戦記」原稿（複製）
山本周五郎『夏草戦記』1945（昭和20）年3月 八雲書店
山本周五郎『山彦乙女』1952（昭和27）年2月 朝日新聞社
山本周五郎『甲州小説集』1974（昭和49）年8月 実業之日本社

深沢七郎（ふかさわ しちろう）

深沢七郎 井伏鱒二宛書簡 1968（昭和43）年3月10日
「井伏先生と共に」草稿
深沢七郎作 井伏鱒二に贈った将棋駒台
深沢七郎選集出版記念ギターリサイタル ポスター 1968（昭和43）年3月2日
深沢七郎「ギター独奏集 祖母の昔語り」レコード 1973（昭和48）年 日本コロムビア
深沢七郎 井伏鱒二宛書簡 1968（昭和43）年9月9日
深沢七郎 小林富司夫宛葉書 1957（昭和32）年12月14日消印

夢屋にて 写真パネル 撮影 佐藤真樹
今川焼屋「夢屋」ポスター デザイン 横尾忠則
映画「榎山節考」ポスター 1983年
写真パネル 夢屋にて 撮影 佐藤真樹
深沢七郎「榎山節考」原稿（複製）
「中央公論」第71年第12号 1956（昭和31）年11月
深沢七郎『榎山節考』1957（昭和32）年2月 中央公論社
『榎山節考』出版記念会次第
映画「榎山節考」プログラム 1958（昭和33）年4月 映画タイムス社
深沢七郎「笛吹川」草稿（複製）
深沢七郎『笛吹川』1958（昭和33）年4月 中央公論社
映画「笛吹川」パンフレット 1960（昭和35）年

山崎方代（やまざき ほうだい）

山崎方代「茶の花の咲ける小径をらんらん少女が一人今降りて来る」幅
山崎方代「丸出しの甲州弁で申します花は死であり死も花である」額装
山崎方代「ほゞずきの花が咲いているほゞずきの花は母である」一枚物
山崎方代「一ひらのさくらの花が流れ来て黒き机の上にとまれり」短冊
山崎方代「ふるさとの右左口郵は骨壺の底にゆられてあが帰る村」色紙
山崎方代「山さくら花の盛りとなりにけり鎌倉山の春深くして」短冊
山崎方代「方代の一日が暮れて朝が来て又ふあふあと日は闇けてゆく」幅
山崎方代「不二が笑つてゐる石が笑つてゐる笛吹川がつぶやいてゐる」幅
山崎方代「茶碗の底に梅干の種二つ並びをるこれが愛といふものなのだ」短冊
山崎方代「まつ黒くすみわたる馬の目の中に釜無川が流れている」短冊
山崎方代「ある朝の出来ごとでしたこおろぎがあがかけ茶碗とび越えゆけり」扇面色紙
山崎方代「大きな波が寄せて来る大きな笑いが笑い出したり」短冊
山崎方代「牧丘町 不二が笑つてゐる石が笑つてゐる笛吹川がつぶやいてゐる」幅
山崎方代「なまよみの甲斐の源氏の末なればゆみ取の弓高くあげなむ」幅
山崎方代「ほんとうの酒がこの世にあつた時父もよいにき吾もよいたり」短冊
山崎方代「右の瞳をつむりて弓の糸を引く蛙のごとき晩年なりき」短冊
山崎方代「寂しくて一人笑えば茶ぶ台の上の土瓶が笑い出したり」短冊
山崎方代「しのゝめの下界に降りて来たる時石の笑いを耳にはさみぬ」短冊
写真パネル 湯川晃敏氏撮影
方代愛用の品 拡大鏡 眼鏡 万年筆 茶碗
山崎方代『方代』1955（昭和30）年10月 山上社
山崎方代『右左口』1973（昭和48）年12月 短歌新聞社
山崎方代『こおろぎ』1980（昭和55）年11月 短歌新聞社
山崎方代『迦葉』1985（昭和60）年11月 不識書院

中村星湖（なかむら せいこ）

中村星湖「少年行」原稿（複製）
「早稲田文学」第18号 1907（明治40）年5月
中村星湖『少年行』現代代表作叢書第12篇 1915（大正4）年10月 植竹書院
島崎藤村 中村星湖宛葉書 1921（大正10）年12月17日
坪内逍遙 中村星湖宛書簡 1914（大正3）年10月4日
鈴木三重吉 中村星湖宛書簡 1929（昭和4）年9月7日
「赤い鳥」第13巻第3号 1924（大正13）年9月

前田 晁（まえだ あきら）

田山花袋筆「文章世界」創刊号立案（複製）

小出檐重画「文章世界」第15巻第11号表紙原画〈複製〉1920（大正9）年11月
前田晁『少年国史物語』原稿〈複製〉
田山瑞穂宛 前田晁死亡通知はがき〈複製〉
島崎藤村 前田晁宛書 1942（昭和17）年（推定）7月20日
国木田独歩 前田木城宛書簡 年月不明15日
吉屋信子 前田晁宛書 1915（大正4）年6月4日

三井甲之（みつい こうし）

「アカネ」創刊号表紙原案 1908（明治41）年2月〈複製〉
伊藤左千夫 三井甲之宛書簡 年不明11月21日
長塚節 三井甲之宛書簡 1908（明治41）年（推定）1月8日〈複製〉
三井甲之訳『ファウスト』1930（昭和5）年
三井甲之愛用の品 インク壺・ペン皿
三井甲之「大伴家持」草稿
三井甲之「ふる雪にうつみて見えぬ伏屋にも隣にかよふ道はありけり」短冊
三井甲之「古事記論」原稿
三井甲之『短歌概論』1930（昭和5）年10月 しきしまのみち会

中里介山（なかざと かいざん）

中里介山「大菩薩峠 流転の巻」原稿〈複製〉原本 日本近代文学館蔵
中里介山「大菩薩峠 他生の巻」原稿〈複製〉原本 日本近代文学館蔵
中里介山「大菩薩峠 白骨の巻」原稿〈複製〉原本 日本近代文学館蔵
中里介山『大菩薩峠』1918（大正7）年11月 玉流堂
中里介山『大菩薩峠』1919（大正8）年4月 玉流堂
中里介山『大菩薩峠 甲源一刀流の巻』1921（大正10）年5月 春秋社
中里介山『大菩薩峠 鈴鹿山の巻』1921（大正10）年5月 春秋社
「大菩薩峠」新国劇パンフレット
「隣人之友」通巻84号 1933（昭和8）年12月
中里介山 後閑林平宛葉書 1922（大正11）年9月3日

伊藤左千夫（いとう さちお）と山梨の歌人たち

「馬酔木」第3巻第2号 1906（明治39）年2月
伊藤左千夫 岡千里宛葉書 1905（明治38）年7月2日
伊藤左千夫 岡千里宛葉書 1905（明治38）年12月28日
伊藤左千夫 岡千里宛葉書 1906（明治39）年1月12日
伊藤左千夫 岡千里宛葉書 1906（明治39）年8月3日消印
伊藤左千夫 岡千里宛葉書 1906（明治39）年11月11日
伊藤左千夫 岡千里宛書簡 1911（明治44）年12月11日
神奈桃村「紫芋をかこひ穴よりとりいたし芽あるとなきを選びわかるかも」短冊
「馬酔木」第3巻第6号 1906（明治39）年10月〈復刻〉
「アラゝギ」第2巻第1号 1909（明治42）年9月
岡千里「落椿地上にあそび居たりける青鷗のつがひ枝に上れり」短冊
岡千里「あかつきを囀りそめて落椿地上に赤くぬれにゐれたり」短冊
岡千里「吾子等のあさいはさめず紅のはなあたらしき落つばきかも」短冊
伊藤左千夫「敷妙の家のうちとの物みなのおよきにきほひ咲ける花かも」短冊
神奈桃村「岩窟に安置されたる百体の石の看音見てまわりけり」短冊
神奈桃村「岩窟のおくまるところ真かゝやく黄金の像一寸八分」短冊
岡千里「落椿みだれて赤き花屑に日輪黒くはめてある如し」短冊
岡千里「木末より一輪落ちて花くずのくれなゐる叫び動きたるかも」短冊
日原無限「時雨空霽れなむとする雲の色彼の雲の色よ君が心に」一枚物

秋山秋紅蓼（あきやま しゅうこうりょう）

秋山秋紅蓼「ぶどうの房」句稿
秋山秋紅蓼『兵隊と桜』1940（昭和15）年1月 沙羅書店
秋山秋紅蓼「俳句四格調の説」原稿（複製）
秋山秋紅蓼「自由律精神について」原稿
秋山秋紅蓼「きいろいのみものがすずしく遠ういなづま」色紙
秋山秋紅蓼「炭火」句稿
秋山秋紅蓼「バラの咲いた朝で夢之話をしている」短冊
秋山秋紅蓼 画 素描「わびすけ」
秋山秋紅蓼 画 一枚物「銀座大増の大福」ほか

田中冬二（たなか ふゆじ）

田中冬二「本栖村」色紙
田中冬二「冬日落暮」色紙
田中冬二「浴泉記」草稿
田中冬二「香水の人を忘れず軽井沢」短冊
田中冬二「雪女郎銀の簪ひろひたる」短冊
田中冬二 落款印影
田中冬二愛用の万年筆
田中冬二 深沢正志宛書簡 1964（昭和39）年4月9日（複製）

木々高太郎（きぎ たかたろう）

木々高太郎『笛吹』1948（昭和23）年3月 世界社
木々高太郎「笛吹 一或るアナーキストの死」原稿（複製）
木々高太郎「雨と殺人」原稿
木々高太郎「書くということ」原稿
木々高太郎「文学における実感について」原稿
小栗虫太郎 木々高太郎宛葉書 1937（昭和12）年2月10日消印
江戸川乱歩 木々高太郎宛葉書 1935（昭和10）年8月8日
林麟『頭のよくなる本』（カッパ・ブックス）1960（昭和35）年10月25日9版（初版同年10月10日）
光文社
「シュピオ」第3巻第5号 1937（昭和12）年6月

小尾十三（おび じゅうぞう）

「文藝春秋」第22巻第12号 1944（昭和19）年12月
小尾十三『雑巾先生』1945（昭和20）年2月 満洲文藝春秋社
小尾十三旧蔵 芥川賞記念品の腕時計
小尾十三「母への反抗時代」原稿（複製）
小尾十三「親子だるま」原稿
小尾十三「しつけ糸」原稿

村岡花子（むらおか はなこ）

村岡花子『赤毛のアン』1954（昭和29）年12月13版 三笠書房
村岡花子『赤毛のアン』翻訳原稿（複製）
村岡花子「昔のこと、今のこと」原稿
村岡花子『随筆集 心の饗宴』1941（昭和16）年4月 時代社
村岡花子「初めての本」原稿
村岡花子『ヘレン・ケラー 20世紀の奇跡』1964（昭和39）年3月 偕成社

徳永寿美子（とくなが すみこ）

徳永寿美子「あんじゅとずしおう」原稿
徳永寿美子『あんじゅとずしおう』1958（昭和33）年9月 実業之日本社
徳永寿美子「小公子」原稿
徳永寿美子「子供と童話」草稿
徳永寿美子「たこたこあがれ」草稿
徳永寿美子『小公子』1948（昭和23）年5月 広島図書
徳永寿美子『小公子』1956（昭和31）年1月 偕成社
「母」第6年第8号 1920（大正9）年8月〈複製〉原本 成蹊学園学園史料室蔵
徳永寿美子『薔薇の踊り子』1921（大正10）年2月 アルス〈複製〉
徳永寿美子「甲斐のくに七里が岩のいわつつじあやに咲きけんう月のまひる」短冊

八木義徳（やぎ よしのり）

「満洲観光聯盟報」第5巻第6号 1941（昭和16）年6月
八木義徳『母子鎮魂』1948（昭和23）年3月 世界社
八木義徳『風祭』1976（昭和51）年8月 河出書房新社
八木義徳「系図」原稿
八木義徳「灰色の海に」色紙
八木義徳「甲州と私」原稿
八木義徳「夢のかけ橋成る」原稿
八木義徳「文章は血と土とそして海の風から生れる」色紙
八木義徳「胡桃」原稿
「文藝」1973（昭和48）年12月
「日本文学者」創刊号 1944（昭和19）年4月
『八木義徳全集』第1巻 1990（平成2）年3月 福武書店 妻正子に宛てた献辞入

武田泰淳（たけだ たいじゅん）

武田泰淳「小事」原稿
武田泰淳「L恐怖症」原稿
「海」第1巻第5号 1969（昭和44）年10月
武田泰淳『富士』1971（昭和46）年11月 中央公論社
武田泰淳「わが子キリスト」原稿〈複製〉原本 日本近代文学館蔵
武田泰淳『わが子キリスト』1968（昭和43）年12月 講談社

李良枝（イ・ヤンジ）

李良枝「由熙」草稿
李良枝『由熙』1989（平成元）年2月 講談社
ソウル大学卒業証書
芥川賞正賞の記念品
愛用の筆筒、文具類
李良枝「石の聲」草稿
李良枝『石の聲』1992（平成4）年9月 講談社
李良枝「かずきめ」草稿

辻 邦生（つじ くにお）

「海」創刊特大号 1969（昭和44）年7月
辻邦生『銀杏散りやまず』1989（平成元）年9月 新潮社
「新潮」1982（昭和57）年2月
辻邦生「ある生涯の七つの場所 祭の果て」原稿
辻邦生「南イングランドの印象から」原稿
「銀杏ちりやまず」モノオペラパンフレット
辻邦生「君を夏の一日に喩えようか シェイクスピア「ソネット」の一部」色紙

第3室 芥川龍之介

【大川の水（誕生・少年期）】

伯母のふきが使った長唄稽古本
「牛乳の用法」パンフレット 1904（明治37）年11月 耕牧舎
愛用の水泳帽
暑中休暇日誌 1908（明治41）年7月21日～8月31日
芥川龍之介「我輩も犬である」原稿
芥川龍之介「義仲論」原稿「東京府立第三中学校学友会雑誌」1910（明治43）年2月掲載
「東京府立第三中学校学友会雑誌」第15号 1910年2月

【空中の火花（文壇登場）】

菅虎雄筆「我鬼窟」扁額〈複製〉
芥川龍之介「鼻」草稿「新思潮」1916（大正5）年2月掲載〈複製〉
「新思潮」創刊号 1916（大正5）年2月
夏目漱石『社会と自分』1915（大正4）年11月 実業之日本社
芥川龍之介「葬儀の記」原稿〈複製〉
芥川龍之介「秋」草稿
芥川龍之介『傀儡師』1919（大正8）年1月 新潮社
芥川龍之介『点心』1923（大正11）年5月 金星堂
芥川龍之介『支那遊記』1925（大正14）年11月 改造社

【ぼんやりした不安（苦悩と死）】

芥川龍之介筆「澄江堂十首」卷子〈複製〉原本 天理大学附属天理図書館蔵
『近代日本文藝読本』全5巻 1925（大正14）年11月 興文社
芥川龍之介『湖南の扇』1927（昭和2）年6月 文藝春秋社出版部
芥川龍之介「文芸的な、余りに文芸的な」原稿「改造」1927（昭和2）年4月掲載〈複製〉
芥川龍之介「或阿呆の一生」原稿「改造」1927（昭和2）年10月掲載〈複製〉

【書画の魅力】

芥川龍之介 素描「もろこし」
芥川龍之介 素描「亀」
芥川龍之介 水彩「花」
芥川龍之介 水彩「男性像」
芥川龍之介 水彩「女性像」1910（明治43）年
芥川龍之介 水彩 風景画
朝鮮半島の地図
芥川龍之介 小穴隆一宛書簡 軸装 1922（大正11）年7月9日
芥川龍之介 石川寅吉宛書簡 1924（大正13）年3月8日
芥川龍之介 西村貞吉宛書簡 1921（大正10）年7月21日（推定）
芥川龍之介「主ぶり」幅
芥川龍之介「紙窓風漸瀝」額装
芥川龍之介「抱虚懐欲歩古今」一枚物

【芥川の俳句】

芥川龍之介「黒南風の」他俳句草稿
芥川龍之介「札白し牡丹畑の夕あかり」他俳句草稿
芥川龍之介「日もすがら海鳴る音や麦の秋」他俳句草稿
芥川龍之介「喇嘛寺のさびしさつげよ合歓の花」他俳句草稿
芥川龍之介「朝顔や鉢に余れる夢の丈」俳句草稿